

職種紹介④ カンファレンス参加者

新宿区在住 秋山 佳苗

私は一般人としてリハ工学カンファレンスに参加している。

初めてカンファレンスを聴講したのは大学4回生のときだった。大学の研究テーマとして福祉機器を選択し、生きた情報を探して各地の福祉機器イベントを徘徊していたところ、温かい方々とのご縁がありこの活動を知るに至った。それまで福祉というジャンルをほぼ座学でしか学んでいなかった私は、カンファレンスに参加して大きな衝撃を受けた。そしてこの世界の魅力にすっかり取り憑かれ、違う業界の職に就いた現在も足を運んでいる。

まず、カンファレンスに参加されている方々の職種の幅の広いこと!無知な私は、福祉機器はその道の専門家がそれだけを黙々と研究しているものかと思っていた。しかし実際に会場にいらっしゃったのは、機器を利用している方、医療関係者、エンジニア…福祉に携わるあらゆる職種の方々に、その皆が研究者でありクリエイターであった。カンファレンスはそのような方々の知恵の結集だった。しかも現場直送の鮮度一番の情報である。生意気ではあるが、当時は難解で専門的な書物を読むよりもこのカンファレンスに参加するほうがずっと有意義だと思っていた。

また、演題発表のエネルギーさといったら!発表はもちろんだが、聴講者の方々も圧倒的だ。発表者と聴講者の間で議論が起こる。それは見解の違いによる議論ではなく、利用者にとってベターな方法は何か?という同じ目的に向かう議論であるため、それぞれの意見は聴けば聴くほど奥深い。どの意見も正しいように思える。ある目的に対して、正しい唯一の方法を決めるのは本質ではなく、むしろたくさんの方々の選択肢があることにこそ価値があると思う。一般的なサービスがそうであるように。

カンファレンスの場を通して、これまで数々の素晴らしい発明・発見が提案され共有されてきたのだろう。だからこそ、この情報がカンファレンス参加者のみ共有されていることが惜しい。現場業務で忙しい方や、事情があり参加が難しい方など、情報を必要としながら、参加できない方々にも共有できれば、カンファレンスがさらに多くの方々にとって貴重な存在となるのではないだろうか。

(ここで、福祉をサービスのひとつと仮定して記述することをご容赦いただきたい) 今のご時世、サービスは利用者側が選択する時代である。外食のサービスを例に考えてみる。外食といえば今や、インターネットで好みの店を調べて、料理の内容、長所や短所といった情報を集めてからサービスを受けに行くことができる。そうすることで利用者は高い確率で自分の好みに合った適切なサービスを受けられる。これが可能なのは、利用者目線でサービスの情報がデータベース化され共有されているからである。様々な制限はあるのだろうが、カンファレンスの情報を上述のように利用者目線で共有・閲覧できるようにすれば、利用者が自らの判断で自分に合った選択肢を吟味できるようになる一助を担えるのではないだろうか。自分がもしサービスを受ける側になったら、出来れば自分の判断でサービス内容を選択したいと思うだろう。

世に発信される情報が、利用者にとって有意義で新鮮であり続けるためにも、カンファレンスがこれからも多様な考え方が忌憚なく披露され議論される場であってほしい。私はリハ工カンファレンス・ファンのひとりとして今後も聴講させていただきたいと思う。